

大学図書館におけるリテラシー教育効果の評価-明治大学「図書館活用法」授業評価を事例として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2014-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢野, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16767

大学図書館における リテラシー教育効果の評価

—明治大学「図書館活用法」授業評価を事例として—

矢野 恵子*

1 はじめに

今日の大学図書館に求められる機能・役割の一つとして、「学習支援及び教育活動への直接の関与」が明確に位置づけられるようになった¹。大学図書館では以前から、新入生向け図書館ガイダンス、ツアーや情報検索講習会、さらには授業の一コマを使つての文献検索指導などの図書館利用教育を行ってきたが、今後は更に、大学の情報リテラシー教育に積極的に関わっていくことが求められる。同時に、今日の教育は、「何を教えるか」ではなく、「学生は何ができるようになるか=学習成果（ラーニング・アウトカム）」が問われている²。従つて、図書館が今後主体的な情報リテラシー教育活動を行っていくのであれば、その成果を明確に示すための評価（アセスメント）を行っていく必要がある。

本稿では、国内外で行われている図書館のリテラシー教育評価の動向や事例をみていくとともに、明治大学で開講されている学部間共通総合講座「図書館活用法」の授業効果評価の取組みを紹介する。この授業効果評価は

*やの・けいこ／明治大学 学術・社会連携部 和泉図書館事務室

学習成果評価（アウトカム・アセスメント）とは異なる視点の評価ではあるが、「授業がその後学生の役に立つものかどうか」ということを見ることで、図書館の教育活動の成果を示すことができると考える。

2 国内外の情報リテラシー教育評価

米国の大学図書館界における評価は、ACRLにより1998年に「学術図書館アウトカム・アセスメントに関するタスクフォース報告書（Task Force on Academic Library Outcomes Assessment Report）」が発表されて以降、図書館の蔵書やサービスを評価する際、学生の満足度による評価ではなく、図書館を利用した学生にどのような変化がもたらされたのかという視点での評価に重点がシフトした。2000年には「高等教育機関における情報リテラシー能力指標（Information Literacy Competency Standards for Higher Education）」が設定され、以後大学図書館ではこの指標をもとにした情報リテラシー教育アセスメントが数多く行われているⁱⁱⁱ。アセスメントの手法としては、伝統的にもアンケート調査や事前・事後テストの手法がよく用いられているが、近年は、ポートフォリオ、リサーチペーパー、注釈付文献リストなど、学生のパフォーマンス（最終成果物やリサーチの過程など）を見るアセスメントも増えてきている^{iv}。ARLとワシントン大学図書館による「図書館評価大会（Library Assessment Conference）」^vや英国ヨーク大学の「図書館および情報サービス機関における国際評価大会（Northumbria International Conference on Performance Measurement in Libraries and Information Services）」^{vi}では、前述のような手法を使ったアセスメントの取り組みが数多く発表され、欧米や英国をはじめとした諸外国のアセスメント意識の高さがうかがえる。米国における大学図書館のアセスメントは、冒頭に挙げた教育活動全般に求められるアウトカムの明示のためだけではなく、図書館の価値や大学教育に対する貢献度を示すための重要な取り組みの一つとしても認識されている^{vii}。

リテラシー教育の長期的な効果や成績との関係を示すためのアセスメントの事例として、次の二つの報告は興味深い。一つ目はルイジアナ州立大学図書館で行われたアセスメントで、「リサーチ手法およびそのツール

(Research Methods and Materials)」という授業を履修した2,147名にオンラインアンケートを実施して調査を行ったものである。回答率は少なかった(15%)ものの、学生は授業履修後も、長期に渡って授業で学んだツールやスキルを役立てているという結果を得た^{viii}。二つ目は香港浸会大学図書館でのアセスメントで、こちらは8,000名以上の学生の図書館ワークショップ参加回数と卒業時GPAを統計的に計算するという、大規模なものである。サンプルグループの全体を見ると、24.5%のグループにしかワークショップ参加回数とGPAの肯定的な「相関関係」(2つのデータに何らかの意味を持つ関係があるということ。ワークショップに参加した学生は良い成績をとったという「因果関係」ではない)は見られなかったが、ワークショップの機会が多くあるグループほど、GPAとワークショップ参加回数の間の肯定的な相関関係がより高くなるという結果を得た^{ix}。

日本の大学図書館でも、海外に比べると数は少ないが、図書館評価、情報リテラシー教育評価やアウトカム・アセスメントの事例がすでにある。文教大学では、約1,000名の卒業生に対してアンケート調査を行い、図書館利用と学生の学習成果の間には一定の関連性があることを見出した^x。広島大学図書館と嘉悦大学図書館では、それぞれ情報リテラシー教育と図書館利用教育の前後にテストを行いその結果を比較するという調査を行い、いずれもそれぞれのプログラムの効果があったことを確認した^{xi,xii}。また、アウトカム・アセスメントではないが、慶應義塾大学図書館では、情報リテラシー教育プログラムを履修した学生約3,000名の情報検索過程レポートを分析し、学生のリテラシー能力の傾向を調べるという評価を行っている^{xiii}。

3 明治大学における学部間共通総合講座「図書館活用法」の授業効果評価

3.1 背景

学部間共通総合講座「図書館活用法」は、半期2単位を付与する明治大学の正課授業で、2000年から開講されている。現在の授業内容は、文献・情報(図書、雑誌論文、新聞記事など)の探し方、レポートの書き方、著作権に関すること、書物の愉しみについてなどで、図書館を使いこなす能

力（図書館リテラシー）、情報検索・入手・利用できる能力（情報リテラシー）、レポート・発表資料の作成ができる能力（学術リテラシー）および読書への関心を深めることを授業目標としている。本授業は学年、所属学部を問わずに誰でも履修することができ、2012年度は駿河台キャンパスで1コマ（履修者数50名）、和泉キャンパスで4コマ（同253名）、生田キャンパスで1コマ（同36名）開講された。教員と図書館職員が協働で授業に当たっていることや単位認定をしていることなどが大きな特徴で、この授業を中心とした明治大学の図書館を教育の場として積極的に活用している取り組みは、「平成19年度特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」にも採択された。特色GP採択を契機として、図書館職員のタスクフォースを中心に、授業コーディネータの教員と図書館職員で、講座（プログラム）を組織的・体系的に評価するプログラム評価活動を2008年度より開始した^{xiv}。その結果、2009年には「学習達成目標」と授業全体の目標を設定し、2010年度からは目標に基づいた新カリキュラムに変更した^{xv}。その後も評価結果を用いての授業改善の取り組みを継続している^{xvi}。

これまでの評価活動は、学習達成目標の設定や授業改善といった、プログラム（授業）に焦点をあてた内容であった。そこで、2012年度は評価活動の次のステップとなる、授業効果評価を試みることとし、以下の2つの目的を設定した。

1. 図書館活用法授業の効果を測り、明示する
2. 図書館活用法授業の履修時期（学年）はいつが最も効果的かを探る

具体的に解決すべき評価課題は、以下の3点である。

1. 図書館活用法授業を履修した学生が、授業の内容をその後の学習・研究に役立て、それが良い結果をもたらしたか？
2. 図書館活用法授業の内容は、大学生活（授業や授業に関する勉強以外）において役に立ったか？
3. 業は全学年の学生が履修できるが、何年次に履修するとともに最も効果的か？

これらの課題を解決するべく、次項で述べる方法で評価を行った。

3.2 方法

「図書館活用法」授業を過去に履修したことのある、調査時点で4年生の学生に対し、surveymonkeyというオンラインアンケートシステムを使い、アンケートを実施した。アンケートは対象となる学生全員に、大学の全学的な教育支援システムを通じて回答依頼とURLのリンクを送信した。回答期間は2013年1月31日から2月9日までとし、この期間に2回学生へお知らせを配信した。アンケートの回収率を上げるため、回答者に記念品として図書カードを進呈することにしたが、用意できた図書カードが50枚だったため、回答者の中から50名に図書カードを進呈（回答者が50名を超えた場合は抽選）するという形にした。回答締切日の回答者数は33名だったため、回答期限を2月20までに延長し、再度依頼のお知らせを出した。最終的に得られた回答は、アンケート対象者338名のうち35名（全体の10.4%）であった。

質問項目は、5つの大きな項目に分かれており、各質問は表1の通りである。1つ目の項目は回答者の属性に関すること、2つ目は授業がその後の「学術の場」で役立ったかどうか、3つ目は授業がその後「学術以外の場」で役立ったかどうか、4つ目はレポート・論文・プレゼンテーション課題に関する役立ちについて、そして5つ目は授業の履修学年についての質問である。

表1 アンケート質問項目

<p>0. 「あなた自身についてお伺いします」 氏名、学部、学科、学年、学生番号、「図書館活用法」履修年度・期、 「図書館活用法」履修時の学年</p>
<p>質問1. (授業・勉強など学術の場において)「図書館活用法」の授業内容が役立った ことはありましたか？ ※「はい」「いいえ」の選択式</p>
<p>質問2. (質問1で「はい」と答えた方にお伺いします。)それは、 (1) どのような機会で、(2) 図書館活用法の授業内容の何が、 (3) どのように役立ちましたか？ ※記述式</p>
<p>質問3. 学術(授業・勉強など)以外の場において「図書館活用法」の授業内容が 役立ったことはありましたか？ ※「はい」「いいえ」の選択式</p>
<p>質問4. (質問3で「はい」と答えた方にお伺いします。)それは、 (1) どのような機会で、(2) 図書館活用法の授業内容の何が、 (3) どのように役立ちましたか？ ※記述式</p>
<p>質問5. 下記のタイプの課題に取り組んだことはありますか？ あるテーマについて書くレポート、研究論文(卒業論文、ゼミ論文等)、応募 論文(学生論文集等への応募)、実験レポート、プレゼンテーション・発表 ※各課題について「ある」「ない」の選択式</p>
<p>質問6. 質問5の課題に取り組んだとき、以下の情報収集手段をどの程度使用しま したか？また、その結果、求める情報を入手できましたか？ 図書館の紙資料、図書館の電子資料、インターネット ※各手段について、 「どの程度利用したか」の頻度(4段階)、「求める情報を入手できたか」の 程度(4段階)を選択式</p>
<p>質問7. あなたの授業履修の時期について、どのように考えますか？ また、その理由をお書きください。 ※「早すぎた」「遅すぎた」「丁度よかった」の選択と理由の記述</p>
<p>質問8. 他の学生に、どの学年での履修を勧めますか？ またその理由をお書きください。 ※「1年生」「2年生」「3年生」「4年生」の選択と理由の記述</p>

3.3 結果

対象者 338 名と回答を得られた 35 名を学部別にみると、法学部 6 名、商学部 4 名、政経学部 10 名、文学部 7 名、理工学部 2 名、情報コミュニケーション学部 5 名、国際日本学部 1 名、農学部と経営学部は 0 名であった。履修時の学年は、1 年生が 12 名、2 年生が 14 名、3 年生が 4 名、4 年生が 4 名であった。

授業・勉強など学術の場で授業内容が役立ったことがあったかどうかという質問に対しては、32 名が「はい」と回答し、全体の 91% となった。「はい」と回答した学生には、具体的に「どのような機会ですべて」「何が」「どのように」役立ったかという点を記述式で回答してもらった。「いつ」「何が」の記述内容をカテゴリ別に分けて表したものが図 1 である。「いつ」役立ったかという点では、レポート、論文執筆時が最も多く、「何が」役立ったかについては、検索技術や検索方法についての知識が多くあげられた。「どのように」を見ると、検索に関しては「参考にする文献の数が増えた」「時間短縮できた」「見つけたいものだけ探すことができた」などの回答が、レポート執筆については「基本的な書き方をより具体的に理解したことでレポートがより書きやすくなった」などの回答があり、検索の仕方やレポートの書き方が全く分からなかった学生が分かるようになるだけではなく、すでにある程度できていた学生も、さらに良くできるようになるといった効果もあるようだ。また、「レポートを書く際に戸惑わずに済みました」「不安なく書くことができた」といった回答も見られ、学術の場において、学生の心理面へも良い影響を与えていると考えられる。一方で、授業内容が役に立たなかったと回答した学生が 3 名おり、授業の改善が必要な点があるのかもしれない。授業改善は今回の評価課題ではなかったため、理由にまでは踏み込んでいないが、なぜ授業が役立たなかったのかを確認することはやはり必要だろう。学術の場以外での役立ちは、46% の学生があったと回答したが、学術の場での役立ちと比べると低かった。それでも、検索や情報探索について学んだことが、勉強以外のことにも役立っているようだ。

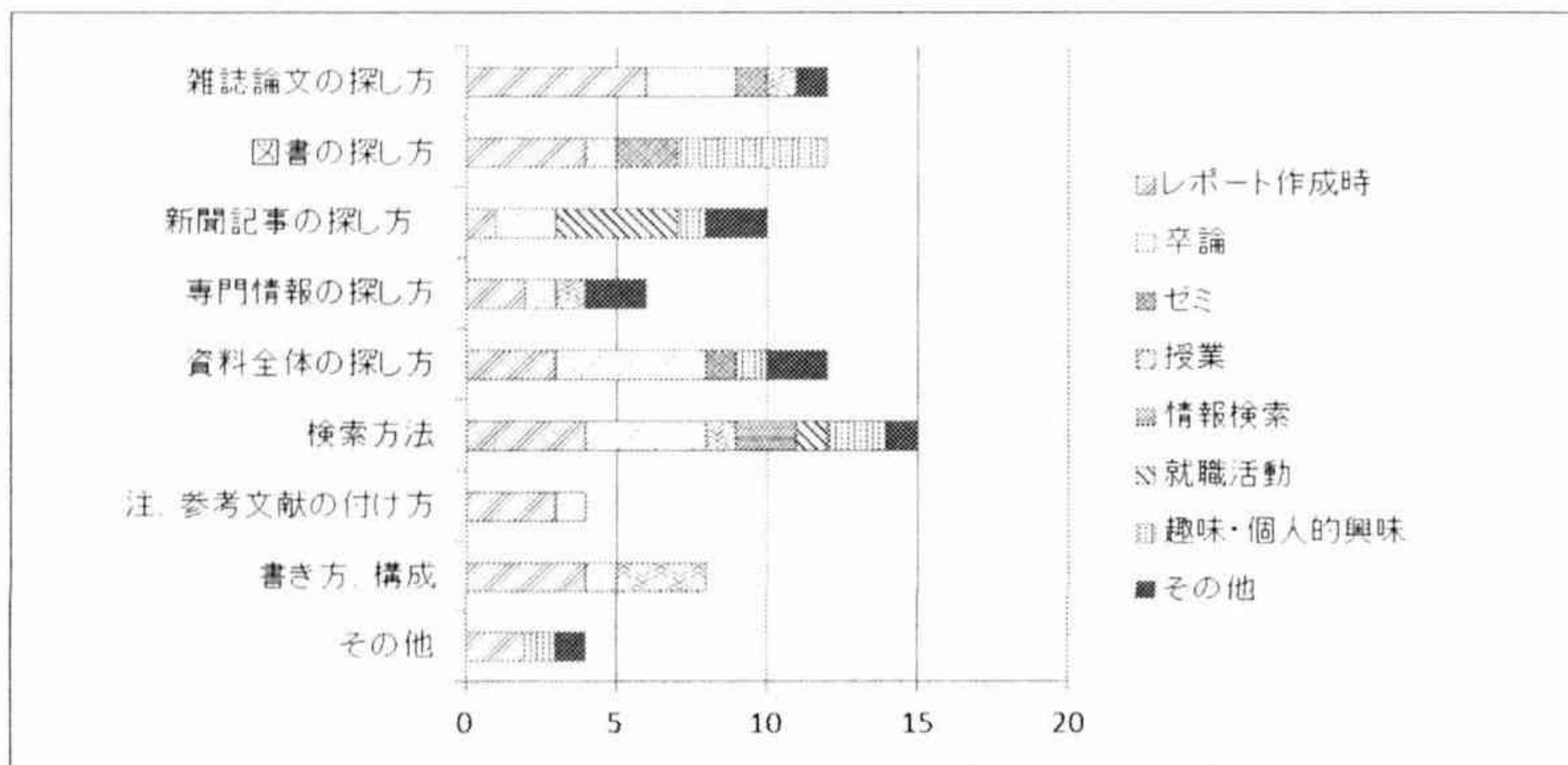


図1 学術の場において「いつ」「何が」役立ったか

全ての学生は「あるテーマについて書くレポート」に取り組んだことがあると回答し（図2）、このような課題に取り組む時の情報収集手段としては、図書とインターネットが良く使われていた（図3）。図書館の電子資料を頻繁に利用したが、全く求める情報を入手できなかったと回答した学生が1名おり、これはデータベースの使い方が分からなかったのか、データベースの選択が間違っていたのか（例えば雑誌記事索引データベースを使って新聞記事を探そうとしていたなど）、それとも他の理由があったのか、残念ながら今回の調査でははっきりできていない。また、図書館の紙資料を全く利用しなかったという学生が1名いるが、同じく理由は分からない。

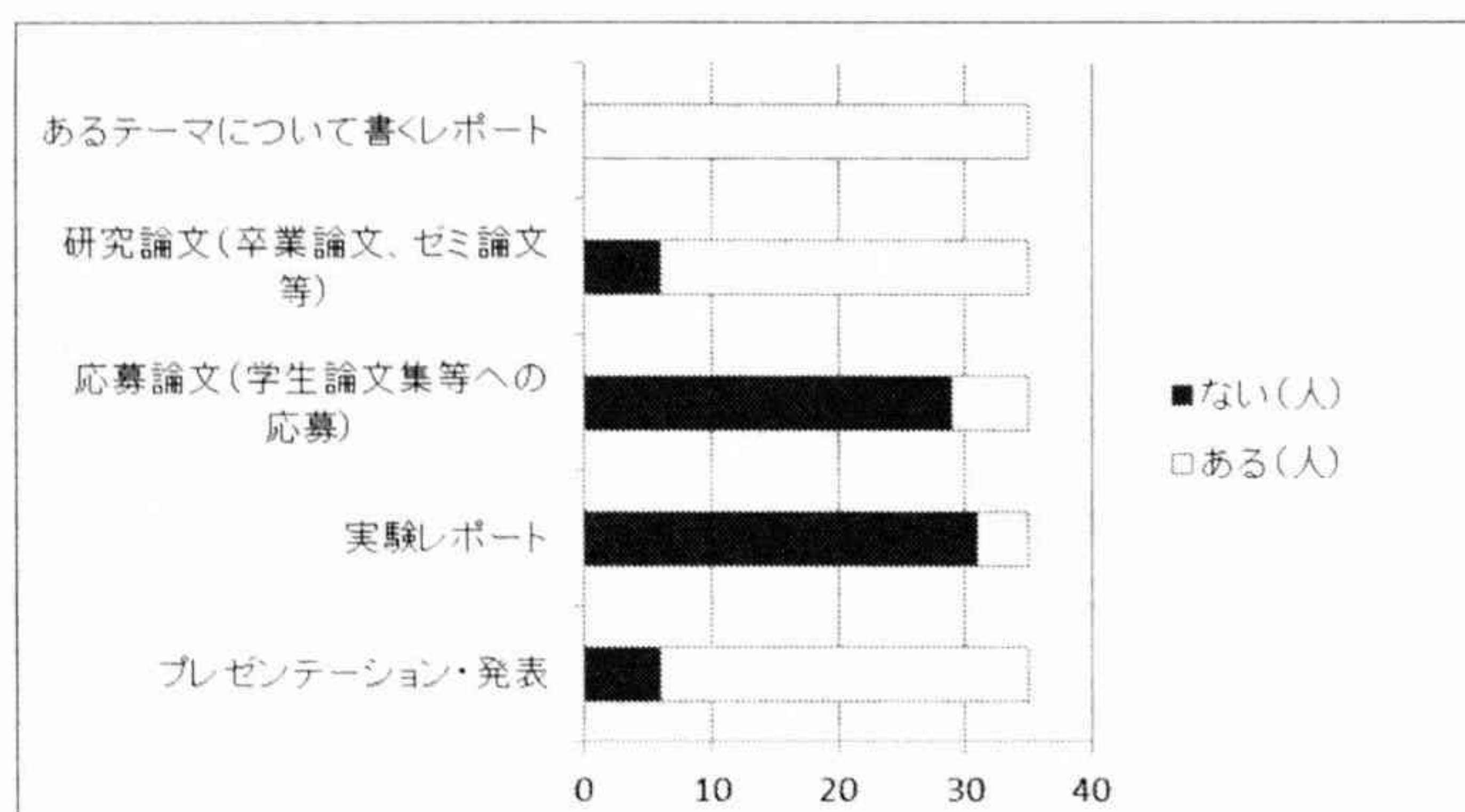


図2 取り組んだことのある課題

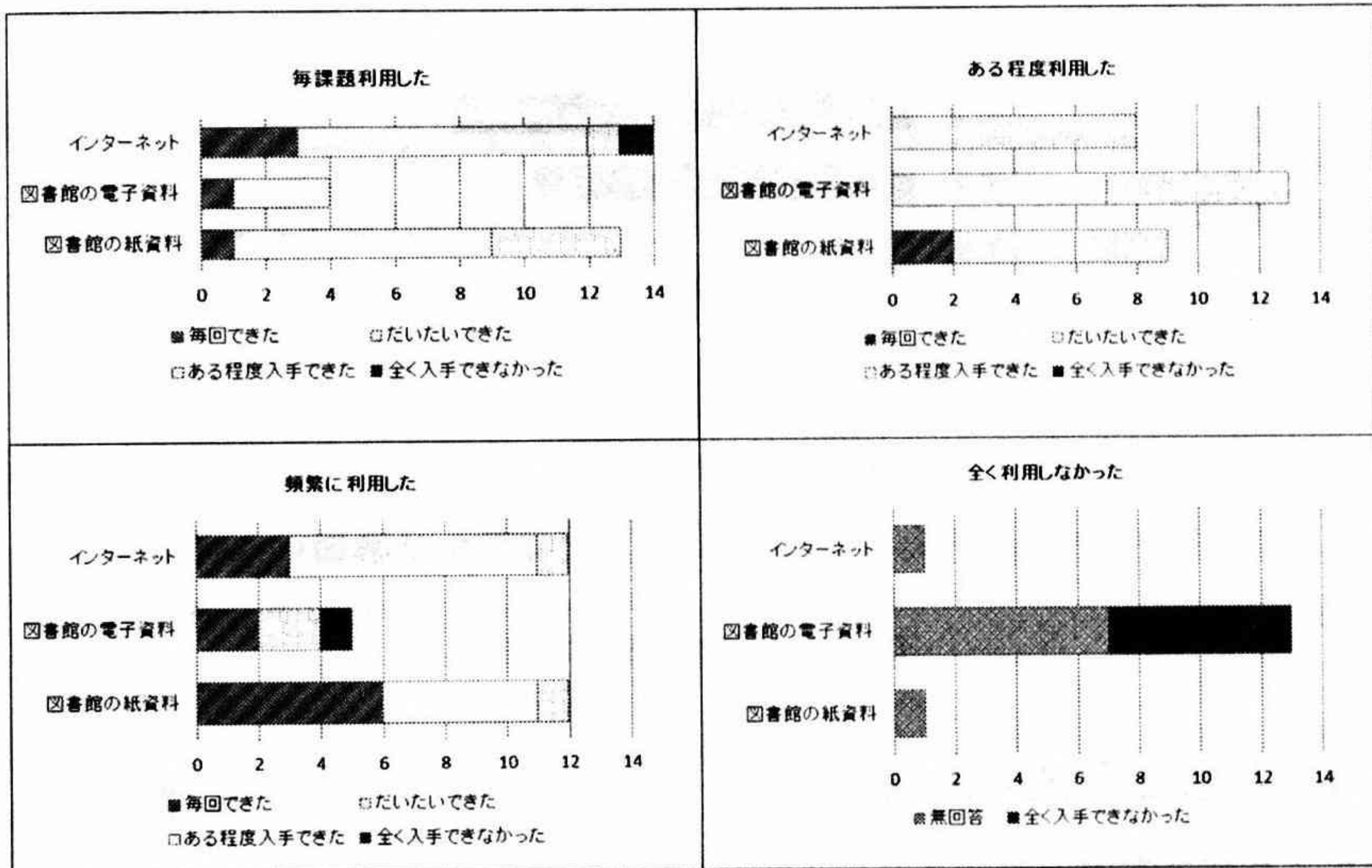


図3 利用した情報収集手段とその結果

授業履修時の自分の学年とその時期の適切性については図4の通りである。まず、自分の履修時期が「早すぎた」と感じた学生は一人もいなかった。1年生で履修した学生は全員が「丁度よかった」と、4年生で履修した学生は全員が「遅すぎた」と回答し、学年が上がるにつれ、「丁度よかった」の回答は減っていった。他の学生に勧める履修学年は、86%が1年生で、その理由としては、「授業内容を多くのレポートに活かすことができるから」「大学生活を円滑にする手段の一つだと思うので、大学一年生時に学びたかったし、学ばせるべき」「早いに越したことはない」など、学生自らの経験を踏まえた上で、そのように考えているようだ。一方、2年生という回答が4名、3年生という回答が1名おり、3年から始まる専門的な学習やゼミ履修の前に受講すると良い、と考える学生もいた。

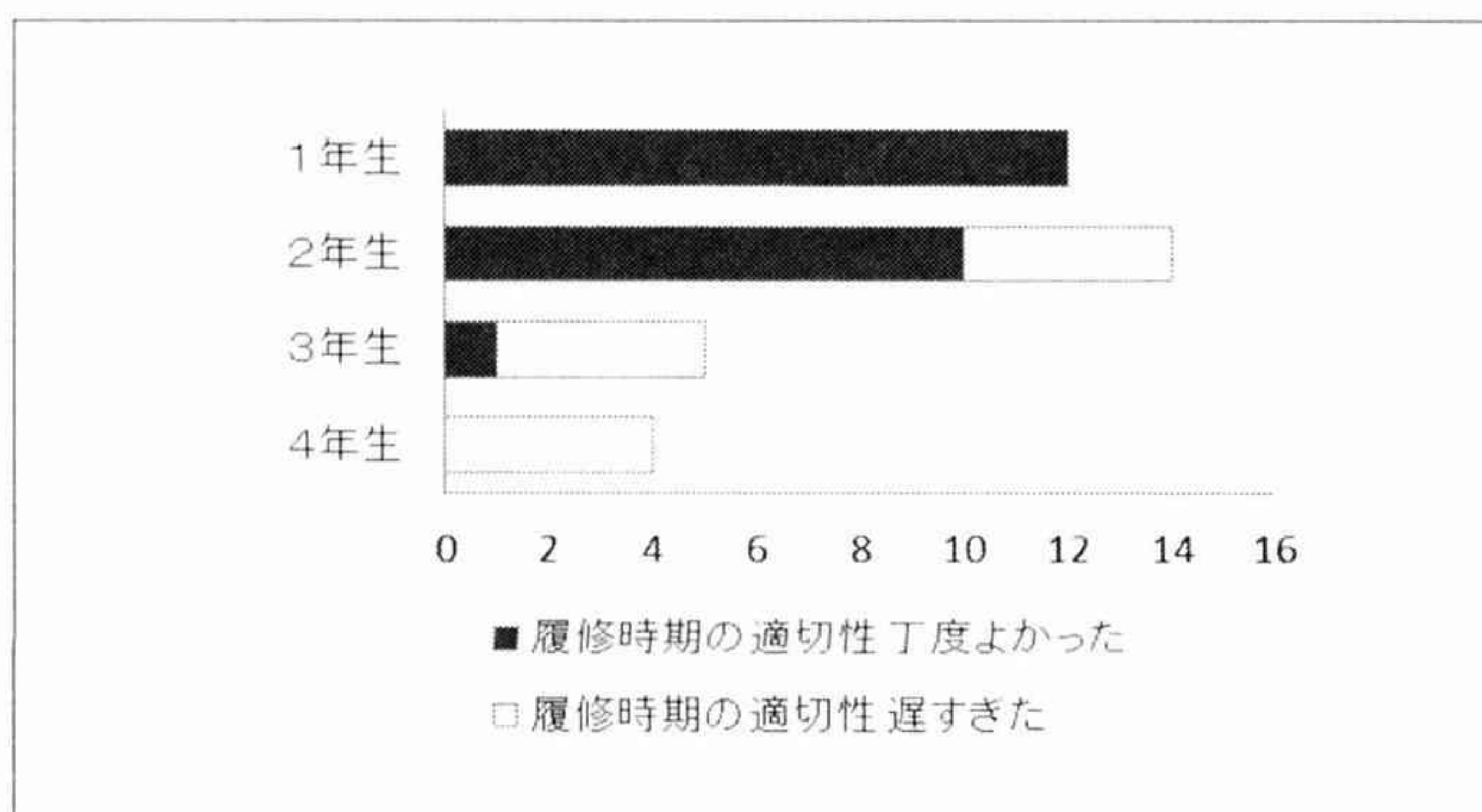


図4 利用した学年とその適切性

3.4 考察と今後の課題

3つの評価課題に対する結果をみていく。まず「図書館活用法授業を履修した学生が、授業の内容をその後の学習・研究に役立て、それが良い結果をもたらしたか？」という課題に対しては、9割の学生が「授業内容がその後の学術の場で役立った」という回答し、レポートや卒論といった、今回の調査でも全てあるいは8割強の学生が在学中に取り組んだことがあると回答した場の役立ちが見られた。「図書館活用法授業の内容は、大学生活(授業や授業に関する勉強以外)において役に立ったか？」という課題については、5割弱の学生が「授業内容がその後の学術以外の場で役立った」と回答し、読書などの個人的趣味・興味や就職活動の情報収集に役立ったことが分かったが、学術の場での役立ち程多くはない。「授業は全学年の学生が履修できるが、何年次に履修するともっとも効果的か？」という課題は、履修時の学年が上がるほど、履修時期が遅すぎたと回答する割合が高くなっており、また、他の学生にどの学年での履修を進めるかという問いには、ほとんどが「1年」と回答しており、授業は1年次に履修するのが望ましいと考えられる。

今回はアンケートの回収率が10.4%と低かったため、統計的にはこの結果のみで図書館活用法授業の有効性が確実に証明されたとは言うことはできず、今後追加の調査が必要となるであろう。1割の学生は、学術の場で「図

「書館活用法」の授業が役に立たなかったという回答をしていることについても、これは授業内容の問題なのか、あるいは授業内容を活かす機会がその後の学生生活でなかったのか、それともその他の理由なのか、次の評価で明らかにしていきたい。また、1年次の履修が望ましいという結果を受けて、パソコンを使った演習が中心となる授業で、どのように授業環境を確保しつつ、履修定員を増やすことができるかも、考えていかなければならない。さらに長期的な計画としては、アンケートによる学生の自己評価だけでなく、学生の実際のパフォーマンスを評価する、成績との関係を見る、授業履修前後の情報リテラシー能力の変化に焦点をあてた評価をすることなども検討していきたい。

4. おわりに

今回は図書館が行うリテラシー教育について、その内容が学生のその後の学術生活や大学生活で役立っているかをアンケート調査を用いて評価した。今回のアンケートでは9割が「学術の場で役立った」と回答しており、「図書館活用法」授業の効果や有益性のある程度は確認することができた。この結果は、今後の授業内容の検討、学生への授業の宣伝、授業担当者のモチベーション向上、大学に対する図書館（員）のアピールにもつなげていくことができる。

リテラシー教育評価やアウトカム・アセスメントを行うことは必要ではあると分かっているが、図書館の日常業務に従事しつつ、包括的かつ網羅的なアセスメントを実施するのは容易ではない。しかし、完璧を目指さず、「よい意味での『いい加減さ』を感じてほしい」という言葉^{xviii}を忘れず、今後も少しずつでも図書館におけるリテラシー評価を進めていきたい。

引用・参考文献

- i 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会 (2010)「大学図書館の整備について(審議のまとめ)ー変革する大学にあって求められる大学図書館像」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm [参照 2013.1.7]
- ii 文部科学省中央教育審議会 (2008)「学士課程教育の構築に向けて(答申)」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm [参照 2013.1.7]
- iii Gilchrist, D., Oakleaf, M. (2012). "An essential partner: the librarian's role in student learning assessment (NILOA occasional paper No.14)." University for Illinois and Indiana University, National Institute for Learning Outcomes Assessment, p.19
- iv Oakleaf, Megan. (2011) "Are they learning? Are we? Learning and the academic library." *Library quarterly* 81(1), 引用は p.62
- v "Library Assessment Conference: Building Effective, Sustainable, Practical Assessment." <http://libraryassessment.org/> [参照 2013.1.7]
- vi "10th Northumbria International Conference on Performance Measurement in Libraries and Information Services." www.york.ac.uk/conferences/northumbria [参照 2013.1.7]
- vii Oakleaf, Megan. (2010) "The value of academic libraries: a comprehensive research review and report." Association of College and Research Libraries
- viii Daugherty, L., Russo, F. (2011) "An assessment of the lasting effects of a stand-alone information literacy course: the students' perspective." *Journal of academic librarianship* 37(4), 319-326.
- ix Wong, S., Cmor, D. (2011) "Measuring association between library instruction and graduation GPA." *College & research libraries* 72(5), 464-473.
- x 戸田あきら、永田治樹 (2007)「学生の図書館利用と学習成果ー大学図書館におけるアウトカム評価に関する研究ー」『日本図書館情報学会誌』53(1), 17-34.
- xi 庄ゆかり、長登康、稲垣知宏、ほか (2011)「大学1年生の文献情報リテラシー能力と図書館による情報リテラシー授業の評価」『大学図書館研究』92, 27-35.
- xii 山田かおり (2005)「図書館利用教育の評価: 嘉悦大学1年生を対象としたアウトカム測定の試み」『大学図書館研究』73, 15-24.
- xiii 上岡真紀子 (2003)「大学1年生の情報リテラシー能力の分析: 日吉メディアセンターの試み」『大学図書館研究』69, 42-52.
- xiv 久松薫子、西脇亜由子、矢野恵子 (2009)「『図書館活用法』プログラム評価活動報告」『図書のパラダイム: 明治大学図書館紀要』13, 35-50.
- xv 久松薫子、矢野恵子 (2009)「『図書館活用法』プログラム評価活動報告(2)」『図書のパラダイム: 明治大学図書館紀要』15, 1-19.
- xvi 矢野恵子 (2013)「『図書館活用法』プログラム評価活動報告(3)」『図書のパラダイム: 明治大学図書館紀要』17, 157-167.
- xvii Barbara E. Walvoor 著; 山崎めぐみ, 安野舞子, 関田一彦訳 (2013)『大学教育アセスメント入門: 学習成果を評価するための実践ガイド』ナカニシヤ出版, 引用は p.139